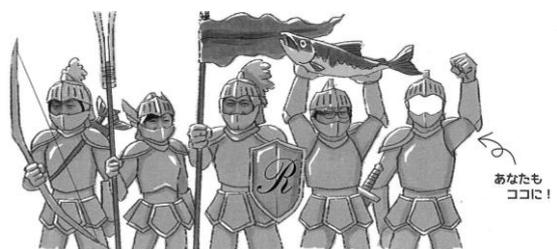


2 「羅臼町活性化ワーキンググループ」【羅臼町】

羅臼の若者が主体となって「俺たち自慢の故郷 世界にたったひとつのRAUSU」を合言葉に、町のビジョンを考え、その実現に向けて企画・行動しています。



あるものを生かして
新たなものを
生み出していきたい



芦崎 拓也さん



Q：芦崎さんのご出身は？

A：中学校卒業まで羅臼で育ったんですが、羅臼を離れ、仕事の関係で30歳のときに戻ってきました。羅臼から離れていたときは、知床が世界遺産になったことや、水産業が低迷してきていることなど、羅臼を外から見ていました。

Q：ワーキンググループとは？

A：羅臼の未来について話し合うのがワーキンググループです。現在のメンバーは、20代から

30代で、羅臼町出身者はメンバーの半以下なんです。これが、このワーキンググループの良さでもあって、外から来た人は、みんな羅臼はいい町だと言うんです。でも、地元の人は何とも思っていないんです。このギャップが面白いんですね。今まで両者の交流や意見交換の場がなかったんですが、このワーキンググループができて、それができるようになりました。

Q：3年前から継続している「しれとこ羅臼こんぶフェスタ」について教えてください。

A：訪れてきてくれる観光客や羅臼の子供たちに、羅臼の昆布の良さを知ってもらいたくて始めました。羅臼の昆布が出来上がるまでに多くの工程があることを知らない観光客や子ども達がたくさんいます。羅臼の昆布は、日本一の手間暇がかかっていると言われていて、その製法をしっかりと伝えたいと思ったんです。ですから、昆布が製品になるまでの工程を体験してもらうコーナーを設置したり、昆布漁師さんにメッセージを書いてもらって会場に掲示したり、昆布をより深く、より身近に感じてもらうための工夫をしています。

Q：これからのビジョンについて教えてください。

A：水産業が低迷して、観光にシフトしてきている中、自分たちは、水産業も観光もどちらも大切だと考えていて、その両方をうまく融合させて、今よりもっと羅臼を盛り上げたいと思っています。そのために、今は使われていないものでも、使えるものはないか、まず、今ある資源を見つめ直して、あるものを生かして、新たなものを生み出していきたいですね。「できるわけない」と言われたことほど、できた時は、本当に嬉しいですね。

インタビューを終えて（生涯学習課：川森 功偉）

あるものを生かす。羅臼には、昆布をはじめとした海産物、そして世界自然遺産でもある知床がある。芦崎氏は、ないものを探すのではなく、今あるもの、今は使われていないけれど使えるものをどう生かすか、それと羅臼の人との結びつきを重視する。それが、将来の羅臼のため、羅臼の子ども達のためだと語っていた。芦崎氏の気張らず、無理せず、楽しんで取り組んでいる姿が印象的だった。

詳しくはこちら

